

イタリア司教協議会の常任委員会のメッセージ

生命に使える

どの国にも子供がこの上のない宝です。子供の数の多少と、そして各家族、また国家の各機関から子供に注がれる愛と心配の度合いによって、その国民の将来に向かってどれ程の希望を持っているかが解ります。生命に開けた姿勢のないところには、希望もありません。同時に、敬老者はその国の記憶と根であり、敬老者に対して与えられる注意と尊敬の度合いによって、その国民の自尊心が明らかです。

芽生える生命、実の結びに近づく生命！各国民の文明度が、どれほど生命に尽くしているか、そこから明らかになるのです。生命に尽くす第一の奉仕者は、言うまでもなく両親です。生命に対する奉仕は女性の胎に宿るときから始まります。妊娠中絶の悲劇を除くためには、母性と父性の自覚を深めるところが大切です。母性と父性の責任感と言えば、それは親の要求を満たすために子供を産み育てるのではなく、却って子供がいつか巣立ちして自立する能力を得る日を目指しながら、親としての奉仕を尽くすことです。自由と責任をもって成長した子供が、「自分の道を歩め」と育ててくれた両親に対しては、深い感謝の気持ちを持って止まないでしょう。

これこそ、生命です。残念ながら、生命を乱用する危険は、いつも身近に迫っています。例えば、道徳上許されない重いこじつけを使ってでも、是か非かを問わずに子供を得る権利を強調する場合です。子供は権利の対象ではない、あくまでも賜物です。人には人の人格を敢えて操ることが出来るのでしょうか。いかなる系図や所有権を威張るのではなく、子供はただでその誕生を望み、ただでその誕生を賜っていただくのです。結婚生活の冠はわが子を産むことにあると確信する一対の夫婦が、もしその恵みが与えられないことをはっきりと発見することになれば、どんなに苦しむだろう！こちらにも、それをよく察することができます。こういう夫婦の嘆きを共鳴しながら、お二人に母性と父性のほかの道を思慮することを勧めたいです。親と子供を繋ぐ愛の絆が、養子や託児の制度によっても実現できます。母性と父性を生かして、献身と他人に対する奉仕の道は多様です。

生命に仕えるというのは、職場や道路に出会える危険から生命を守ることでもあり、また煩いや苦しみに見舞われた生命を愛することでもあります。生命はいかなる状態にあっても尊厳すべきです。重病の場合にも、老齢のために少しずつ意識と体力を失いつつにある場合にも、ともかくいかなる調子の人生でも、それに価値が無いとあえて主張することは誰にも許されません。却って、その状態にある仲間こそ、家族の皆から寛大に迎え入れられるのです。驚かざるを得ないのは、痛みに見舞われた人生を消すことが許されているか否か、今頃さかんに取り上げられる議論です。その反面、痛みを如何にして和らげることが出来るかという研究に対しては、あまりに力が注がれないと言う現状です。痛み止めの手当てを通して、人生の尊厳が守られます。親愛なる友に見守られながら、幼年のときと変わらない愛情に抱かれたまま、死を静かに迎える人間が永遠の命に向かうという尊厳です。

この理由のために、生命に自発的な奉仕を尽くす決心をされたすべての方々に感謝を申し上げます。責任観と排他的な愛をもって親としての努めを果たすすべての両親、また司祭、修道士、修道女、教育家、教師、それから両親と共に子供の教育と加担する祖父と祖母をはじめ、多くの大人の方々に感謝を申し上げます。更に、両親の重大な責任の立場を察したために彼らの困難を軽視せずに、却って援助と激励をはかる社会機関の代表者の方々に感謝を申し上げます。子供の出産を助けるために全力を注ぐすべての

産婦人科医、産婦、看護婦の方々にも感謝を申し上げます。中絶の恐ろしい決断へ誘惑する原因を取り除くために一所懸命に働くお陰で、その世話なしには生まれられなかった多くの子供の誕生を見守ったボランティアの方々に感謝を申し上げます。自分の家で年寄りを見ることを選んだ方々、またいろんな国から移住して家に残る年寄りに献身的な世話を注ぐ方々に感謝を申し上げます。自分の国の伝統を尊重し、またその未来性を信じ続ける、生命に使える誠実なすべての皆様に感謝を申し上げます。

イタリア司教協議会の常任委員会
ローマ, 10月2日 2007年, 保護天使の記念日